

転生したがケツ龍皇  
(♀) に子作り要求され  
るこの世界はおかし  
いっ！！

鳩は平和

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

俺は困惑していた……原作ラノベ『ハイスクールD×D』の世界にいつのまにか転生していることを、家に下半身蛇の身体を持つ幼女とヤギのようにねじ曲がった大きな角を持つ女性と一つ屋根のを暮らしている上に、ケツ龍皇ことヴァーリー・ルシファーが女の子になった上に俺に夜這いをし、学園のプリンスと雷の巫女がべったりすぎてなんか怖い!!

この世界何か色々おかしいぞっ!!

色々あつて人から悪魔に転生し、崩壊しすぎた原作に心労で胃がマツハでやられるお話。

鳴上「なんで俺が女の子になっている上に逆バニーの服装している!？」

???「それはもちろん、君が女の子になりその格好になるんだよ」

鳴上「……あんた誰よ？」

花のお姉さん「私は君の旅路を見守る、見ての通り綺麗な花のお姉さんさ……ほら、私  
だって……ね？」

※原作キャラがTSしオリ主のヒロインになっちゃいます。それが苦手な方はブラ  
ウザバックを推奨します。

# 目次

はおかしい!!

61

チートキャラが冷凍保存パックで輸送された、俺自身何を言ってるのかわからな

い  
—  
1

原作キャラの距離感が近いのはおかし

いっ!!  
—  
11

俺がオカルト研究部歓迎されるのはおか

しい!!  
—  
21

俺が悪魔に転生するとか笑えない。

35

僧侶の眷属になるのはやっぱりおかしい

—  
48

俺に神器（セイクリッド・ギア）があるの

チートキャラが冷凍保存パックで輸送された、俺自身何を言ってるのかわからない

さて…………俺の名前は鳴上直人、ただの転生者です。いや本当に…………ただの転生者。最近よく見る神様転生とかでチート能力とか授かってハーレム形成するみたいなことを今から

…………そんなもの、ウチにないよ（J○J○フラグ回収）と

チート能力とかそんなの一切ないなか、俺には悩みがいくつかある。今もその心労で胃がやられそうなので整理します。

まず…………この世界は普通ではない…………俺がいた三次元ではなく二次元…………つまり俺は原作の世界に転生してしまった。原作の名前はハイスクールD×D…………現代ファンタジーであり、王道ハーレムライトノベル作品。

いやまあ、好きだよ…………こう、よく見る小説のORETUEEE!!じゃないし、復讐系じゃないから、サクサク読めるし、ヒロイン可愛いし…………主人公は変態だけど優しい…………変態だけど（大事なことなので二回いった）

でも、それで転生したいかという話は別だ。

ここは現代ファンタジー……つまり人間だけの種族だけじゃなく、悪魔、堕天使、天使 etc……果てには神やドラゴンだつてこの世界に存在する（ほとんどの人は知らない）北欧ならエルフ、日本なら妖怪といった様々な種族がいる。そりや頭がおかしい人なら、ヒヤツハーチート能力使つて主人公のキャラを寝取つて俺さまのヒロインにしてやるぜつて原作に介入するだろうお。

だが、俺は原作に介入することなくモブに徹して、一般家庭を築きたいと俺は考えている……まあ、チート能力ないから元より武力でそんなの出来るわけないんだけど……例えば、原作の知識を主人公に教えて恩返ししてもらうとか……いや、我ながらゲスい。まあ、そんなことすれば三陣営のリーダー達に警戒されるし、テロリストのみんなに実験に誘拐……いや、殺されるかもしれない。だから自分は関わらない……まあ、といつても……読んだはずの原作の記憶はほとんど朧気だし、覚えているのはキャラの容姿と名前だけという中途半端な記憶喪失とか……

まあ、もし転生者に出会つたなら俺はこう言いたい……あなたは周りに地雷が設置されている場所で爆弾を抱えて寝返りして眠ることができませんかと……

自分は無理だ……こちとらそらのモブとは違うつてやんでい、チクシヨウ。

まあ、他にも地雷が俺の家に転がっているんだけどな……とりあえず次に行こう。

まあ、次というか最大の謎である……………この世界何か色々とおかしい。いや、おかしいのは原作から知ってるんだけどさらにおかしいのは……………いま、目の前にいる少女。俺と同じ年である少女が……………

「やあ、おかえり……………ご飯にするかい？お風呂にするかい？それとも私と子作りするかい？」

中学校の授業が終わり、夜ご飯の買い物を終えて早々……………玄関で裸エプロンをしている。中学生とは思えないほどの身体を持つ……………そんな俺は冷静になりつつ静かにポケットからケータイを出し、番号を打ち込む。

「……………もしもし、警察ですか？不法侵入の変質者がいます」

いかに、目の前にいるキャラが原作最強チートキャラであろうと、法の番人の前では無力だと思っていた……………いま、彼女が俺のケータイに魔力の塊を飛ばし、粉々にしなければ……………

反省の色がない彼……………いや、彼女を見た俺は深いため息を吐きながらキッチンに向かった。

「なあ……………もう勝手に入るのはもういいよ……………けどさ、俺のケータイを耳近くで壊すのはやめて……………下手したら俺の頭が柘榴のように飛び散るんだけど」

「そうかい、君が変なことをしなければ私だつてそんなことはしないよ……………彼女たちが

お腹を空かせて待つてるよ」

彼女はそう言い、キツチンに向かう女性……彼女の名前を言おう。彼女は原作公式最強チートキャラヴァーリ・ルシファーだ……もし他の原作を知っているなら……嘘だつてなるだろう

けど、本当なんだ……なんならそのキャラがもつ神滅具白龍皇の光翼を間近で見せてもらったし、アルビオンの声も聞いた……いやい、アルビオンの声ってイケメンだなあ  
(現実逃避)

それが悩みの一つ……原作キャラが女の子になり、俺に夜這いしてくる。そりやヴァーリの見た目は……神話から出てきたような美しさがある。しかし俺はそれを見るたびに胃痛に悩ませる。

Q あなたは中身が男と知っているキャラに恋しますか？

A 俺に男の趣味はありません。

たとえ、この世界でヴァーリが女の子であろうと、原作を知っている俺は男と言う認識しか出来ない。なんといえいいのか……自分ながら最低だな。

1001

キツチンに着くとテーブルに倒れ伏せている二人の少女を見る……一人は山羊のように太くねじ曲がった少女。もう一人は上半身は何も着ずにしめ縄の紙垂で胸を隠す



褐色の幼女……ここまで来たらまだ警察に通報されるだけで済むかもしれない。だが……下半身が蛇……いや芋虫のように太く……人間にはあるはずの両足がない。

この家……俺以外の人間が誰もいないっ!!

「マヒト〜お腹すいた〜」

俺にご飯を要求する山羊の角を持つ少女……彼女の名前はティアマト。メソポタミア文明で原初の神様……世界創造で、神マルドゥークに体を真つ二つ……いや、ちがう、確かティアマトというキャラは五大龍王で……確か人間時は蒼い長髪に藍色の瞳の美女ってWikimediaに書いてあった……筈だ。

俺は改めて朝飯を食べているティアマトを見た……白い髪に血の様に濡れた赤い瞳……全然違う……もしかして偽者なのか……と首を俺は傾けた。

なんか色々おかしすぎて……もうどうすればいいのか俺にはお手上げ状態だ。

「わかったよ、今簡単なもの作るから……伊吹もそれでいい?」

「う、うむ……それで良い」

そう答えたのは蛇の幼女、彼女の名前は伊吹童子……たしか日本三大妖怪の……あと一説だと、日本最大の化け物八岐大蛇の分霊だとか……まあ、そう言われると納得できるが……そんなすごい妖怪が、俺の家の地下の屋敷に封印されているのかは納得がい

ない。

まあ、もしかしたら爺ちゃんなら何か知っているはずだけど……もう、他界したからな……伊吹自身も何故あそこにいたのかは知らないらしい。

—○●○—

「ふう……お粗末でした」

明日の朝の朝の仕込み等も終えた俺はゆつくりとお茶をのむ……伊吹もティアマトも満足したのか、アイスを食べていた。

「ふむう、ここでお酒があれば完璧なんだが……」

「幼女にお酒出したら、俺が塀の中で過ごすことになるからダメ」

俺の言葉に納得できない伊吹は頬袋を膨らませて、俺を睨んでくるが怖くはなかった。どうやら、封印は解除されてもほとんど力を吸い取れて、本当に幼女並みの腕力しかないらしい。

「貴様、もしや本当に余のことを幼女と思ってはおらぬか？もし、あの時脱皮した後の余であればそうさなあ……てへへ」

最後の笑いで怖さが消えた……脱皮ってやつぱり蛇なのは……でも、普通にお風呂に入っているし……どうなんだ？

「本当の余の姿を見ればお主は余のあまりの美しさに死んでしまうかもしれんぞ」

それってよく見るロリ狐のセリフなんだが……そういうと本気で泣きそうだからお口はチャックしておこう。

「それでヴァーリ……今日も泊まって行くのかよ……ていうか、泊まっている部屋に荷物勝手に置くなよ」

「あれはアザゼルが持つていけて……それに今日の姿もアザゼルに教えてもらった」

あのプリン堕天使……まじで出会った時にドロップキックを喰らわせてやろうか。

「大抵の男はあれで堕ちると言ったが……何がダメだったんだ？」

それは真顔で考えることじゃない……そもそもヴァーリがどうしてそこまで俺に執着しているのかわからない。俺はチート能力も才能もない至ってモブだ。まあ、住人は人外なんだけどな。

「まあ、部屋は無駄にあるから別にいいけど……厄介事だけは勘弁してくれよ」

「ああ、わかっているよ」

ヴァーリはフツと鼻で笑い、こちらを見て微笑んだ。その時ティアマトが俺の裾を引っ張ってきた。

「マヒト……マヒト……これしてもいい？」

ティアマトがもつのはゲームソフトだった。女神というよりもは子供としか思えない。まあ、いいんだけどヴァーリと伊吹よりもいい子だし……あまりの優しさに俺は

ティアマトの頭を撫でた。

「マヒト……どうしたの？」

「いや、お前はそのままいい子に育ってくれ」

—●—

中学三年生にとって夏休みはほとんど受験勉強で消える。和室の一室でセミがミンミンと鳴き、俺の集中力が削がれていく。

「アツツ……マジで熱い」

こんな時に限ってエアコンが故障する上に、修理に来るのが明後日とか笑えない。

「死ぬ……こうなったら、中学の図書館で涼みながら勉強した方がいくらかマシかなような気がしてきた」

かと言って、二人を中学に連れて行くわけにもいかないし……どうしたものかと悩む。

「うへー汗でびしょびしょ……どうにかしたいな」

これは早急に解決しないことに頭を悩ませるが、暑さが原因で思考が纏まらない。

その時、玄関のチャイムが鳴った……通販とか頼んだ覚えがないんだけどなあ。なんか当たったんかな？

そう疑問に思いながら俺は扉を開けた。

「すみません、ハンコかサインお願いします」

「は、はい……なんだろうこれ？」

子供一人は入るほどの大きな段ボール……紙には生物と書いていたためなのか手のひらに冷気を感じた。

玄関の扉を閉めた俺は中身を確認するために開けた……すぐに閉めた。

俺は首を横に振って中身にいる存在を否定……したかった。イヤイヤそんなはずがない……たださえおかしな世界でさらにおかしくなるようなことになるか……

俺はもう一度、中身を確認した……そこにいたのは黒いゴスロリ服を着ており、胸は黒い絆創膏みたいなの……ニツプレスみたいなのものが貼っていた。

「うん……ついた」

むくりと上半身だけ起き上がらせたことにより、彼女が生きていることが証明されたことに俺は頭を抱えた……ヤベエ、胃がキリキリしてきた。

俺の脳内 WikiOediaで目の前に該当するキャラただ一人だけ……この世

界最強ドラゴン無限の龍神オーフィス……ハイスクールD×D世界に置いて二体しか

いない龍神……なんでも、もう一匹の龍神……黙示録の龍……真なる赤龍神帝と全力

で戦った余波で世界滅びるとか……やっぱ怖いな。

ヤベエ、今すぐ段ボールに戻しあの配達員を呼び戻して……平穏な生活に戻りたい。

誰だ……核爆弾を俺の家に送ってきたのは……

その時……俺の頭に……本当に大きいケツ龍皇の姿を思い出した……あいつ

が原因か……あいつは何を考えているんだよっ!!

## 原作キャラの距離感が近いのはおかしいっ!!

「あつつい……………まじで……………」

カオスブリケード

テロリストの大ボスを見殺しして、俺は学園の図書館に向かった。そうじゃなければ俺は今から屋敷で発狂していたかもしれない。そしてこういう時に限ってヴァーリがいなために……………送り返そうにも送り返せないときた。

大丈夫だろうか……………あのまま放置しておいて……………最悪オフィスが飽きて自分で帰るかもしれないし……………いいか。

しかし、俺には外では外で悩みがある……………木の影を見る。

「e q e …… 3 z e …… q r …… w」

「s @ 4 d w …… s @ 4 d w」

真つ黒な出来損ないの人間みたいものがいた……………それも一体だけではなく数多くいた……………それは俺にしか見えずにいた。俺だって、伊吹やティアマトがいなければ発狂して引きこもっていたと思う。

わかるのは影から出てこれないこと……………他人には見えないということ……………何を喋っているのかわからない。こつちが気づかなければ何もしてこないこと……………何故か俺の

屋敷には出てこない。

「あつつい……早く……学園に向かおう」

軽く現実逃避をし、空を見上げながら今も燦然と輝く太陽を見ながら学園に向かった。

—○●—

駒王学園……それは俺が通う学校である。割と偏差値が高い学園であるが……唯一違うのはここを運営しているのが人間ではないこと……悪魔……まあ一般人の人は知らないだろうから別にいいんだけど……困ることないし。

でも気になるのが、どうやってここまでのことできたんだろう。悪魔さん基三陣営って結構、神話の神様の方々に嫌われているイメージしかない。

まあ、長の人たちが強すぎるから……断れなかったんだろう。それなら今頃この町だって、日本神話の神様が来るかもしれないしな。

そういうえば……スイツチ姫とその仲間たちが来る前に……たしか、誰かがいたような……なんだったのだろう。

「やあ、直人くん」

俺が思い出そうとしている時に、爽やかな声が聞こえた。俺は顔を見上げれば……ここにいたのは金髪の少年だった。俺はうんざりな顔をしているが目の前の男はニコニ



コしていた。

「隣……座つていいかい？」

「あのさ、木場………：周りを見てみるよ……：めっちゃ空いているよね？」

「アハハ、いいじゃないか」

ちよつとは空気を読め……：後ろの本棚とかチラツと見れば女の子同士がヒソヒソと話し小さくキヤールと叫んでいた。

「やっぱり木場×木場よ……」

「違うわ鳴上×木場くんよ……」

やめてくれ……：恐ろしい会話を小声で話すんじゃない。ていうか、なんで木場はいつもそんなにニコニコしているんだ!?

境遇知ってるから余計に怖いんだよ……：ぶっちゃけ俺みたいなモブとか、道路で歩く雑草並みの興味を持ってくれたらいいんだよ。

「珍しいね、君がここで勉強するなんて」

「別に、家のエアコンが壊れたからここで涼んだ方が効率がいいだろう？それに試験もあるからしつかり勉強したことに越したことはないだろう。」

たしかにと頷く木場はカバンからノートを取り出した。

「それなら僕もやるよ、二人でやったほうが更に効率上がると思うんだよ」

やっぱり原作キャラの距離感って色々おかしくないかっ!?……………くそっこれが原作補正って言うやつか俺には持っていないもの持ちやがってよこせっ!!その甘いイケメンフェイスと才能とかを寄越せっ!!

まあ、理不尽な怒りは置いておいて……………俺たちは受験勉強を始めた。俺が得意なのは歴史……………木場は全てが得意だった。

運動できて、勉強できてその上、セイクリッド・ギア神器も持っているとか……………何このチートキャラ……………ハイスクールD×Dってチートキャラしか出ないの!?

「直人くん、この歴史なんだけど?」

「何々……………えーと、イスカandalとダレイオス三世……………ああ、なるほど……………たしか……………二人の戦いの前よりも……………たしか150年もギリシャとペルシアが戦争していたんだよ……………テルモピュライの戦いって言って……………」

「へえ、そんな昔に……………」

「そうそう……………そこだけを勉強するよりも関連性を覚えていくと結構効率がいいよ」

俺がそういう時だった……………目の前が光だし……………光が消えると一面砂漠が広がっていた。そこに仁王立ちをした筋骨隆々の偉丈夫。ひげ面には粗野な印象と威厳の男がいた。

『生きろ、……………?]?]?]?]?]?』  
すべてを見届け、そして生き存えて語るのだ。貴様の王の在り方を。この

の疾走を』

????????????  
——ツ!!」

その声と景色が消えたのと同時に俺の頭が鈍器で殴られたような痛みが襲いかかり顔を下に向けた。

「b o e g : : : : e q e g : : q r : : w」

目が合った……完全に目が合ってしまった。

「わりい!!木場、俺……晩飯の買物に行かないとダメだからもう今日帰るは……続きはまた今度」

「えっ……どうしたんだい!?!」

木場の疑問に答えず、俺はカバンに適当に詰めて立ち上がり、そのまま図書館を出た。

—○●○—

絶対に後ろを振り帰らずに俺は屋敷の玄関に着いた。安心のあまりに俺は腰を抜かし、座り込んでしまった。

「……はあ……やってしまった」

あんな無理矢理出るとかキャラに不信しか与えないじゃん……俺、明日から普通に学校に行けるかな。

「むっ、どうした……直人?」

聞き覚えがある声に……俺は顔を見上げた、そこにいたのは伊吹だった。

「伊吹……ああ、ごめん……今ご飯作るから……あれ？」

立ちあがろうとするが足に力が入らない……まだ腰抜けているんだ。俺って……本  
当にビビりなんだな。

「ハハっ……俺ってつくづく……」

自分が自分のこと嫌いになってくる……こんな……いつまで続くんだ。

その時だった……俺の視覚が真つ暗になり……何か柔らかいものが顔に当たる。

「貴様は少し卑屈すぎる……良いか？ そうやって歩みを止めてどうする……余はお前  
を壊さぬ。壊して遊ぶほどには、まだ甘美を知らぬ状態ゆえな」

伊吹は俺の背中をトントンと優しく叩く。

「……どう言うことだよ……でも、もう少しだけこうしていいかな」

「良い良い、いくらでも貴様の診てやるのも、飼い主の務めよな。うんうん」

—●—

伊吹に慰められた俺はキッチンに向かって啞然とした。オーフィスが宝箱にすやす  
やと寝ていた。

「ご飯を食べて、あのまま寝ておる……どうする？」

「いや、どうするって言われても……」

このまま置いておくと俺までテロリスト認定される……………いつそのことスイツチ姫の兄君に……………接点ないし、かと言ってスイツチ姫本人に近づくと消滅させられそうだし……………木場にも頼るわけにはいかないよな。

「おーい、起きろ……………このまま寝てると風邪ひくぞ」

そもそも龍神は風邪引くのかと一人ツツコミしながら、ゆさゆさとオフィスの身体を揺らす。触ってみた感想は人肌の柔らかさと石の滑らかさが混ざった不思議な感触……………寝息がなければ死んでいると勘違いするほどに冷たかった。

「ん……………よく寝た」

臉を擦りながら起きた。

「それで……………あ……………お嬢ちゃん「違う、我の名はオフィス」……………オフィスはなんでここにきたのかな？」

「ヴァーリ……………ここに来ると静寂求められるっていった」

やはり、犯人はあのケツデカ龍皇だったか……………次来た時は……………必ず……………

そう静かに怒りが込み上がる中……………オフィスが俺に近づいてきた。首元をクンクンと匂いを嗅いできた。俺……………ちゃんと風呂に入ってるよ。

「いい匂いする」

「え!？」

いい匂い……それはどう言った意味があるのだろうか……するとオーフィスは宝箱まで歩き、何かをゴソゴソとしていた。そして何かを両手で持ってきていた。

「これ……あげる」

それは杯だった……黄金に輝く杯を持ってきた。なんだこれは？と周りを見るが……至つて普通の杯……もしかしてこれ純金製。

「ひんやりして気持ちい……我のお気に入りに」

「いや……え!?……なんで？」

「ヴァーリ言つてた……住むには……何か払わないといけない」

それじゃ、ヴァーリは身体で支払っているつてか!?……ふむう、クーリングオフできかないかな……いやちよつと待つて……今、オーフィスはなんて!?

「もう一回聞くんけど……今ここに住むつて言つた？」

「言つた……我……ここ気に入つた」

オーフィスの言葉に俺は天井を見上げ、この発端の主を心の底から憎んだことはなかった。

—○●—

特に、変なことはこれ以上起きることなく……オーフィスから頂いた黄金の杯は見事に玄関のインターリアに混ざり込んだ。

オーフィスもずつといるわけでもなく、朝昼晩のご飯の時にはおり、俺が学校に行っている間はどこかに行っている……多分禍の<sup>カオスブリケット</sup>団にいるんだろう……俺としては助かるけど……まあ、食費が上がる。

そんな俺も駒王学園高等部二年生……いやあ、なんか原作に近づいてくると思うと俺の胃がどんどん痛くなりそう。卒業した時には俺の胃が消えているのでは……

さてと……これも神様の運命力なのか……まさか俺が原作主人公である兵藤一誠と同じクラスとは……まあ、そこまで関わることないし良いか……昼休みは1人飯だ。

べ、別に友達いないからじゃないから……ほとんど女子校と言われているし……極端に男子が少ないし……あの3人組なら覗きスポットに行ってるし……だから、友達がないわけじゃないんだ。

「きやああ!!」

突然黄色い歓声が教室に響き渡る……まあ、大体は予想できる俺はゆつくりと視線だけをずらすとそこにいたのは木場だった。

木場は女子たちを気にせず俺の方に近づいてきた……やめて、こないで……300円あげるから!!

「やあ、直人くん……よかつたら、僕とご飯を食べないか？」

「なあ、木場……別にわざわざ来なくてもいいだろう。俺らクラス違うんだからよ」

「そうかい?」

そういうもんだよ……もう、こうすると腐女子の皆さんがゾンビのように群がってくるだろう?俺は平穩に生きたいの……穩やかに暮らしたいの。

「はあ、わかったよ……飯は?食堂?」

「いや、僕が所属している部活に「断るっ!!」……どうしてだい?」

お前が所属している場所って……オカルト研究部じゃないか……そんなの嫌だよ。いや……嬉しいけども……けど嫌だ。

「俺……部外者だろう?そんな奴がきてお前の部長に迷惑かかるだろう?」

「大丈夫だよ、部長にはすでに言ってるから……歓迎していたよ」

わお、嬉しすぎて俺の胃がキリキリと締め付けられるような痛みが襲いかかってくるよ。しかし、無理に断っては怪しまれる可能性があるし……最悪監視される……それだけは嫌だ

「……わかったよ」

「よかった、それじゃあいこうか?」

ああ、今日はなんて厄日なんだろう……もう、周りの女子たちがカップリングの話しているとかここは地獄なのか……



俺がオカルト研究部歓迎されるのはおかしい!!

駒王学園の裏にある旧校舎……古いが窓とかも割れておらずとても清潔感があつた。

「さあ、ここだよ……部長たちも準備が終わっているよ」

上を見上げれば原作通りに木のプレートがあり『オカルト研究部』と彫られていた。

「え？準備って何が？」

ヤダ……もしかして俺を悪魔に転生とか……俺なんてただの転生者で才能もな

い、セイクリッド・ギア神器もないただの一般生徒だよ……だめだ、自分で言つて何か悲しくなってくる。

コンコンと木場はドアをノックし、扉を開ける……見事な調度品の数々に俺は言葉を出せずにいた……これら一つで食費がどれくらい賄えるのだろうか……と思う。

「いらつしやい、鳴上直人くん」

ソファの中央に血よりも紅い髪を揺らす少女……原作メインヒロインの一人でもあるリアス・グレモリー先輩だ。そういえばここつて趣味で作ったとか……さすが魔王の妹さまだな。

「えつと……今日はお招きに預かり恐悦至極でございます？」

俺ちやんと日本語話しているのかと不安になるが、グレモリー先輩はクスクスと笑っていた。

「そんなに硬くならないでちょうだい……いつも木場と仲良くしてくれるから……今日はささやかなお礼よ」

テーブルを見ると……見事なアフタヌーンティーセットの数々……もし俺が買うなら……あまりの値段の高さにきつと立ちくらみするだろう……だってアフタヌーンティーセットに霜降り肉のローストビーフがあるんだから。

「さあ、座って……朱乃、紅茶を用意してくれるかしら？」

「はい部長、鳴上千くんはどうしますか？……コーヒーもありますよ」

黒髪ポニーテールの女子生徒……姫島朱乃先輩が俺に話しかけてきた……紅茶は苦手だしな……ここは無難にコーヒーで行こうかな。

「あの、コーヒーでお願いします」

そう言い朱乃先輩は立ち上がり……どこかに行ってしまった。こう、思ってしまったのはリアス・グレモリー先輩たちに失礼なんだが……

居心地が悪すぎる……俺以外、全員人間じゃないとか……俺、今日生きて帰れるかな……

「どうぞ……」

コトツと……………ホットコーヒーとミルクと角砂糖を二つ置かれていた。

「朱乃、あなたも座りなさい」

「はい、部長……………」

そして朱乃先輩は俺の隣に座った……………もう一度言おう……………あの朱乃先輩が俺の隣に座った。

……………ンンンンンン!! (某蕨の陰陽師) なんだ、これ!? なんだこれは!?

何故、わざわざ空いている向かいのソファではなく、俺の隣に座るんだ。

「あの……………朱乃先輩、何故俺の隣に?」

「あらか問題でも……………」

逆に問題しかないよ、この状況は……………何故、あなたはニコニコしているのか!? 俺のこの状況を見て楽しんでるの!? ドS!! さすが女王さま!! 俺知っているんだから、原作主人公に恋するまで男なんてほとんど同じ顔にしか見えないことを!?

その後……………色々ネガティブなことしか考えられなくなった俺は……………高級アフタヌーンティーとローストビーフも全く味わえなかった。

……………そして昼休み終わりギリギリ……………リアス・グレモリー先輩は俺に一枚のチラシを渡し……………俺はそれを見て胃腸が代わりに悲鳴をあげてくれた。

私こと、ヴァーリ・ルシファーは今、やる事を終え冥界にたどり着いた……といっても墮天使の長であるアザゼルに呼び出しを喰らった。

私にとって、戦いは人生といっても過言ではない、強者との戦いは常に心を躍らせる。アザゼルと戦えるのが私としてはありがたい。それに最近仲間になったアーサー王の血を受け継いだ……ああ、世界は常に興味を注がれる。

けど……今の私にとってそれよりも大切な……直人……君は覚えていないだろうけど、私にとっても今の大切なのは君だよ。ああ、早く地上に戻って君に抱きつき……そして子供を作ろう。

君は抵抗するだろうけど、その顔を見るだけで……その心で……その全てを支配したい。

応接室が開き、ソファには……ひとりの男が座っていた。机にはゲームソフトが無惨に散らばっていた。

「ヨシツクリアだ、どうだこのドラゴンの神様が……これでソウルを回収できるぜっ!!」  
「アザゼル……仕事サボってそんな事していたらまたシエムハザに怒られるよ」

私はソファに座りながら、アザゼルに忠告した。サボり癖はあっても墮天使を長く纏めてきた……そういう意味ではシエムハザと直人もどこか似ている気がするのは気

のせいかな？

「それで要件は？」

「そうだったな……お前さん、最近一人で地上に出ては結構外に滞在しているが、なんだ？美味いラーメン屋でも見つけたのか」

「フツ、まあそんなところかな……今日もこれが終わったら行く予定さ」

それを聞いたアザゼルは3枚の書類を私に渡してきた。

「これは？」

「もし、お前がまた駒王町に行くならこいつらの動向を監視してくれねえか？」

私は書類をめくり……最後のページを見て固まった。ありえない……いえ、考えてみたらあり得る

最後の書類には写真があり、そこには鳴上直人と表記されていた……

「出来れば、一番上のアーシア・アルジエントは監視というよりは保護してほしい。なんでも悪魔を治癒して教会から追放されたらしい……俺が知っている神セイクリッド・ギア器じゃまずあ

りえない……そこでヴァーリにはこの子を保護してきてほしい」

「……………わかった」

「助かるぜ……………それと2枚目と3枚目の小僧の方なんだが……俺の予想が正しければ……………それも十分危険だ。もしかすればまだ確認出来てない神滅具ロンギヌス……お前さんの対に

なる龍が出てくる可能性だつてある」

ああ、そういうえば……すっかり忘れていたな。ああ、もし……直人が赤龍帝を持っていたなら……それはそれでいい。だつて……私が直人の子を身籠れば……必ず強い子が生まれるじゃないか……

「しかし……ヴァーリといいアルビオンといい……雰囲気変わったじゃないか？」

「フツ……そうかな？まあ、アルビオンは最近静かなのは事実だね」

『……私として色々悩み事があつてな……これを喜ぶべきなのか悲しむべきなのか』

そういうえば……時折、直人がアルビオンに同情の視線を送るのはどうしてだろう？

「すでに部下を送つて置いたぜ……合流して情報を共有するのもいいが……お前さんのことだ、大体は一人で行動するだろう？」

アザゼルは……やれやれと肩をすくめて私は書類を手にして部屋を出ようとする。

「そうだ、思い出したが……なんでも、はぐれ悪魔以外の正体不明が暴れているらしい……なんでもそれは人を食すらしい……お前なら大丈夫だと俺は確信しているが……気をつけておけよ」

その言葉を聞き、私は執務室から出て、廊下を歩く。

「にゃ……ヴァーリ、久しぶりにゃ」

私に話しかけてきたのは……着崩れた黒い浴衣、頭には獣の耳……猫耳を動かし、尻

尾が飛び出して、器用に動かしていた。

「今日も、人間界にいる男の所に行くの?」

「まあ、そんな所と言いたいけど……美候は?」

彼女は黒歌……猫よりも希少な猫?と呼ばれる存在で魔力・魔法・仙術・妖術を使うのを長けている。元々は悪魔の眷属だったらしいけど……今ははぐれ悪魔……それもSSはぐれ悪魔と警戒されているらしい……生き別れの妹を探し、すでにどこにいるのかはわかるらしいが……現魔王の妹の眷属であるために連れ出すことに黒歌は頭を悩ませている。

「にや〜……ヴァーリがそこまで気にかけるなんて……私もちよつと味見してみようかにや〜」

舌なめずりする黒歌の言葉に私は聞き逃さなかった。

『黒歌……それは禁句だ』

「黒歌……直人は私のものだよ……私のものを奪うなら……殺すよ」

「にやつ!?……じよ、冗談だにや〜そんなに殺気を送っちゃだめだにや〜」

「……次はないから」

私は……簡単に準備して……人間界に向かった。

学校の休みの日、俺は昼頃にぶつぶつと文句を言いながらコンビニへ向かった

「全く……伊吹めえ……外に出れないことをいいことに俺を使いつ走りをするとか……」

オーフィスも外に出て買い物に出たいと言ったが……そんなことしたらテロリストの皆さんに殺される前に、幼女にあんなにも恥ずかしい格好させた罪で俺は社会的信用を失い死んでしまう。

「そういえば……何か忘れているような……なんだろう」

思い出そうと思いつながら……コンビニへ入った。伊吹は……小豆バーでいか……小豆好きそうな顔してるし……ティアマトは……ハーゲン○ッツで……オーフィスはガリ○リくん（箱入り）にしよう

身体と食欲が合わないのはどうなんだろうか……まあ、無限の龍神さまですし……お供えものとして……どうか、俺の生活に安定を送れますように

ドンっ!!

いろいろと考え込みながら……俺は誰かとぶつかつた。目を向けるとそこには尻餅をついたサラリーマンの男性がいた。

「イツツ……すいません、前を見ずに……」

「すいません、こちらもポーっとしていまして」



俺は手を出し、男性を立たせた時だった……男性のポケットから何か落ちた。それは……木の蔓が巻きついたナイフだった。

「すみません……これっ!!」

俺は男性に渡そうとした時……男性が俺の腕を掴んだ。その細さからは想像できない力で俺の腕に力を込める。

「うふふ、すみません……すみませんねえ……それだけは触られて欲しくないのですよ」  
その気味が悪い笑顔を見た俺は……背筋が凍るほどの不気味さを感じた。俺はすぐにそのナイフから手を離れた。男性はポケットからハンカチを取り出し、落ちたナイフを大事そうに拾いハンカチに包み込みポケットの中に入れた。

「知っていますか? 今週の日曜日の夜は……とても綺麗な満月が観れるらしいですよ」

「そう……なんだ」

男性は空を見上げて、歩き始めた。

「ああ、早く……その日になってほしいです」

男性はそれだけをいいどこかに歩き始めた……なんだよ、あれ……気味が悪すぎる。

「……………ん?」

男が通り過ぎた後……花卉が散らばっていたような……気のせいかな?

「——ッ!!」

ズキリと痛みが腕から感じ……見ると痣が出来ていた。なんだよ……本当にこの世界なにかとおかしい気がする。

そう疑問に思いながら……俺は自宅に帰った。

—●—

「ううん……もう朝か」

身体が重い……昨日夜中までティアマトのゲームに付き合っていたのが原因なんだろうな。そういえば……もうそろそろ原作始まるような……どうなるんだろうな……これから、原作はどうなるんだろうかと心配しつつも、俺モブだから関係ないかっ!!

そう心に誓いながら駒王学園に近道しようと右の角を曲がろうとした時……一つの影が突然現れた。

「イツツ……これで二回目」

今度は俺が尻餅を付き……視線を前に送るとぶつかった人も尻餅を付いていた。

「ほんとっ……何よ……ちよつと!!」

俺は啞然とした……そこにいたのは……黒髪の女子生徒……目は少しきついのか人相が悪いがそんなものは美しさの前では欠点にもならない……

「本当に……いつの間にも立場わかっていないから……」

悪態をつく彼女に俺の脳内に警報アラームが鳴り響く……目の前にいるのは原作主人公のトラウマにもなった……人生初の彼女……天野夕麻ことレイナーレだった。

「ちよつと何か言いなさいよ……」

「あつ、いや……すみませんでしたっ!!」

俺はすぐさま立ち上がり彼女から離れるようにダッシュして立ち去ったのであった。

—●—

それから日曜日が経った……教室では原作主人公に彼女が出来たという話題に埋め尽くされていた。

「早く帰らないと……また夜が来てしまう」

俺は慌てて商店街を走り抜け、近道の路地裏を通るとき……見覚えがある男性が塞ぎ込んでいた。ふと男性が口にしたことを思い出し、空を見上げると……見事な満月が照らされていた。

「うん?……また花びら」

おかしい、ここに花卉が散るような植物なんてないはずなのに……何故か花卉が舞い散っていた。

「……そんなことより……大丈夫ですか?」

「ゲホっ……ゴホっああ……いえ……お構いなく」

その時異臭と……男性が持つ容器に入っているものを見た。器の中に入っていたのは……真つ赤な液体や……人の顔だった。

そんな男性の口は真つ赤に染まり……この男は……人を食っていた  
「なっ!!」

俺は慌てて逃げようとするが、男がいつのまにか持つていた肉切り包丁で切りつけられた……すぐに逃げたのが運が良かったのか、左腕から赤い液体が出た。

「おやおやこれは……一週間ぶりですね。どうですか?……今夜はとても良い満月だと思いませんか?」

男が平然と俺に話しかけてきたことに違和感と恐怖しかなかった。

「ああ、すみません……ずっと我慢していたので楽しくて、ネ」

「なんで……なんでアンタは人を平然と食べるんだよ……はぐれ悪魔……なのかよ」

「はぐれ悪魔?……いいいえ、私はあなたと同じ人間ですよ……まあ、上司は私のことを無能と蔑み……わたしにはこんなにも素晴らしい才能があるというのに……」

そう男が言うと、男の首筋から花びらが勢いよく飛び出し舞い散った……なんだよ、これは?……なんで……俺はこんなふざけた場所を1秒でも早く抜け出したいのに……なんで身体が動かないんだ。

「あなたも私のことを異常と蔑むでしょうが……ただ私は才能に従っているだけ、何より……私は感謝しています……こんなにも良い才能と前世を引き出してくれて!!」

男は血が付いている肉切り包丁を舐めて高笑いしていた。才能……違う、この男はなんていった……前世を引き出した

「しかし、あなたも運が悪い……ですがご安心を……私があなただけを料理してあげますよ」

そう言うと同時に男が俺の目の前にいた……それと同時に俺のお腹に激痛が走る。

「ガハッ!!」

「まずは内臓を全て取り出すために切開を……」

痛い痛い痛い痛い痛いお腹に熱が溜まる……なんで……なんでおれがこんな目に……

ただ俺は平穏な人生を……過ごしたいだけなのに……どうして……

視界が霞んでくる……ここで気絶すれば確実に俺は目の前の男に食べられるのは確実……いつそ気絶してくれた方が……楽かもしれない。

「ああ、早く食べないと香味が抜けると言うときに……私はつくづくツイていませんね」  
男はどこかに立ち去った……ああ、夜が……夜がくる。何も……見えない。

何も見えない真っ暗な中……一つの光……違う……一羽の蝶が飛んでいた。その蝶

がまた一羽……無数に増えていく。

——わたしが見ている。傍にいる。見捨てたりしない。抱きしめる。

——ううん、お願い。抱きしめさせて。

——愛しい全て、わたしは永遠に見守りたい

その言葉は俺を包み込むように言った……とても暖かく心地いいとさえ感じる  
……しかしそれと同時に俺の内側に、認識出来ないナニカが離れることなくへばりつ  
ぎ、蠢き、ただ不快感しか感じなかった。

俺が悪魔に転生するとか笑えない。

深い……底無し沼に沈んでいるような感覚しかなかった。もがいてももがいてもより深く沈んでいく。

俺……死んだんだ……どうなるんだろう……俺……幸いなものが……泣いてくれる家族がいなかったこと……俺がいけないことで少しは原作路線に戻ってくれると嬉しい。

ふと家族で思い出したのが……ティアマト、伊吹童子……ヴァーリ……それにオーフィスだった。あいつら……ちゃんとご飯とか食べるかな……そもそも、敵キャラに遭遇しないのが心配だ。

ヴァーリとオーフィスに至っては大丈夫だろう……チートキャラとラスボスだし……けど、ティアマトと伊吹は違う……伊吹は力をほとんど失い……ティアマトは自分の力を使いたくないと拒絶していた。

だから、俺は……平穏に暮らしたかった。彼女たちとただ……慎ましく生きたかった……けど、その考えはどうやら甘かったらしい。

死んだ……その事実だけは今もある……伊吹にもティアマトにも会えない……何も思いつかない……何か何か……このままここで沈み……目を閉じ死を受け入れることしかできない。

これで終わり

……になんて出来るか!!

今も帰りを待っている彼女たちのためにも……その絶望から目を逸らすなッ、考えろ!! 平凡なりにも……自分はこの世界でも生きていいと言う証を……止まるなッ!! 今ここで諦めて……何になる。

手足の感覚が無くなろうと……いままで、自分は全てを投げ出し、今の現状に甘えるなッ。

もがくが沈むそのときだった上から一つの光が降り注ぎ、一つの人間と形成した、目も口も鼻もないのつべらぼうの顔、あの影の出来損ないとは違い恐怖はなく、それを見ると涙が止まらなかつた俺は手を掴んだ。

「あんたは……」

『Amantes amentes | Omnia vincit Amor』

俺には理解できなかつた……しかし、闇が光に呑み込まれていき……黄金の稲穂



が広がる平野だった、そこに一つの家があった。見たことない……いったこともない景色にどうして……俺は目の前の景色に懐かしむんだ。

心臓の鼓動が早くなりすぎて胸が痛い……息がくるしい……頭が痛い。まるでそれ以上先に行くなど身体が警告しているような感覚だ。

稲穂の平原の中央に一つの祭壇があった……そこには一つの剣が刺さっていた。

「おや？……抜かないのかい？」

「だれ？」

そこにいたのは真つ白なローブを纏い、片手には水晶が施された杖を持っていた。

「ごきげんよう、私は……そうだなあ、花のお姉さんとも呼んでくれ。ほら見ての通りの綺麗なお姉さんさ！」

フードを取ると白い髪に……特徴的に尖った耳をしていた。その時自身の頭に鈍器で殴られたような痛みが襲いかかる。

「俺は……あなたに……出会ったことが……ある？」

どこで……思い出せない……ここじゃないどこかで俺は……もどかしい。しかしなんの話かわからない女性は首を傾げた

「はて？そう言われても……新しなナンパかい？……それでどうするんだい？」

「どうするって……」

女性は祭壇に刺す剣をみた。

「これを抜くのかい？」

「抜く……うぐつ!!」

見ようとすると何かを警告するように頭痛が酷くなる。眩暈もする吐き気もする……まるで俺自身がその剣を拒絶するように……それをみた女性は静かに笑っていた。「そうかい、それを抜かないんだね……それも一種の選択だ……君はどうするんだい？」

俺の後ろから現れたのは金髪の青年だった……青年はその剣の柄を握る。

「それを手に取る前にきちんと考えた方がいい」

やめろ……やめてくれ、お前がその剣を手にしたら……それは、お前にとって最悪の結末に……そう口に出そうとするが、喉に何かつまり、口に出せなかった。

「それを手にしたら最後……君は人間で無くなるよ」

「いいや、僕は見てきた……多くの人が笑っていた……それは決して……」

青年はその剣を祭壇から抜き、空へと掲げた。それと同時に……この国に新しき王が誕生したことを祝福するかのよう、光が注がれた。

「間違いではないはずさ」

それを見た俺は……悲しさしかなかった……お前にはその道しかなかったのか

????????????

そしてその道を平然と選べるお前に俺は……嫉妬し、自分の内側がジクジクと腐っていくのを感じた。

—○●—

体が重い……熱い……なんか柔らかいものに包み込まれているような。俺……生きてるのかな……

ゆっくりと目を開ければそこは……いつもの天井だった。俺……生きているんだ。俺……生きているんだ。じゃあこの重さと熱さはなんだよ。

下に視線を向ければ驚き啞然とした……そこにいたのはティアマト、伊吹、オーフィスが眠ってる。

「俺……実は死んでいるんじゃないか？」

そうじゃなきゃ、前世で彼女11年齢を背負った俺がここまで幸せな出来事が起こるはずじゃない。

うん?……いま……自分の身体に違和感を感じ……違う声にも違和感があった。そして布団から見てもわかるぐらいに胸が膨らんでいることに気づき……恐る恐ると布団を捲ると寝着がはだけ……女性の胸が露出している。

「は……いやいや!!なんでえええ!!」

俺の絶叫で3人が起きた……まだ眠いのか、瞳を擦った。

「むう……まだ眠い……余達は夜から本番というのに……何事じゃ？」

「えっ?! いや……ごめん……じゃなくて!! これっ!! 俺、女の子になったんだよ!!」

しかし、3人は顔を見合わ、首を傾けた。

「ふむ、そのことなんだが……とても言いにくいのだが、貴様は一度死んでおる」

「は? ……死んだって……そういうことか」

つまり、あれは夢じゃなく現実だったということ……それは納得しよう……しかし、女の子の姿になっていることについては理解できない。そしてなぜ生きているのかも……

「お主は悪魔の下僕となつてしまつたのだ」

「ああ……なるほど」

もう……なんか、色々と否定出来ないけどそうなつたんだ。

「一つ聞きたいんだけど……その悪魔にさせた人は?」

「この部屋の隣に寝ておる……貴様をここまで移動させたのは中々苦労した」

誰なんだろうなく二択なだけで……どっちにしろ地獄のような気がしてきた。

そう考えている途中だった……服の裾を引つ張られた。そこにいたのはティアマトだった。その目は……潤んでいた。

「もう……離れないで……」

「…………ごめん…………心配かけて…………よっぼどじゃない限り離れないよ」

俺はティアマトの頭をなでながら…………これからをどうしようかは…いや、一択しかないよな。

「それで3人はバレてないの？」

「この部屋…………我作った…………マヒトの家と次元の狭間を繋いだ。」

オーフィスが親指をたてた…………なるほど、だから俺の部屋と全く同じ…………なんてな  
と思うか？いや、何やってくれるの、この無限の龍神はウロボロスドラゴン

「なあ、オーフィス…………どうやってここから出ればいいの？」

「普通に？」

俺の質問にオーフィスは首を傾けながら答える…………なぜ、疑問系なんだろう。扉を開  
けると…………真つ暗な闇が広がっていた。

「なあ、本当に大丈夫？一歩間違えたら絶対に死ぬ奴じゃん」

「うん…………問題ない…………多分」

多分という言葉を恐れつつ、俺は意を決して足を一歩踏み出す…………なんとということ  
でしょう、あんなにも闇が広がっていた次元の狭間ではなく…………我が家であった。

「よかった…………転生して早々死亡とか本当に笑えないから…………3人はそこで待ってい  
るんだよ」

コクリと3人は頷き扉をゆっくり閉めたのを確認した俺は……その隣の本来の部屋の襖の扉を開けた。ベットではなく布団であるために……誰が入っているのかはすぐにわかった。

「よしっ、大丈夫だ……何、別に死ぬわけじゃないし……大丈夫……大丈夫なはず」

俺はそこに眠る人を確認するために布団を捲る。そこにいたのは雪のように白い肌……それと対照的に髪は血のように紅い髪の女性だった。すぐに誰かわかった俺は天井を見上げた。

本当に……世界っていうのは理不尽に理不尽を織りなした世界だよ。

—●○●—

「ごちそうさま……」

「はい、お粗末です」

リアス先輩が起き……裸で寝ていたために俺は一旦部屋の外に出た。着替え終えたあとはご飯を食べたリアス先輩。

「まあ、その身体を見る限りじゃあ自分の身体が異常というのはわかるわね」

「まあ、そうですね……これ何がどうなっているのかわからないんですけど……これがリアス先輩の趣味ですか？」

「そんなわけないわ……あなたにとあるものを入れたら……そうだったのよ」

もうわかった……あれでしょう……悪魔にしちやう魔法のチェスの駒。

「あるものつてなんですか？」

「……これよ」

「そう言い、リアス先輩が取り出したのは紅いチェスの駒だった。ほらやつぱり……俺、なんでも知っているんだから……」

「これは悪魔の駒イヴァルビスつていうの……上級悪魔は眷属が必要なので、そのために必要なアイテムがこれよ……あなたは生死の境を彷徨つていて、これを使わないほどにね……」

「はあ……先輩つて悪魔なんですか？」

「そうよ……驚いたかしら？」

「そう言い俺にウイंकするリアス先輩……まあ、驚くけど……俺の家今……龍神さんがいるからそこまで驚くことは出来なかった。」

「けど、悪魔つて……こう、召喚したら願いは叶うけど魂をいただくとか……けっこうブラツクなイメージがありました」

「そうね、そういうのは一昔前に流行つていたらしいわね……けど私はそういうのしないわよ」

「わかつてますよ、先輩が眷属に優しくて人にも優しいって言う人は……けど今思ったら羨ましいな、原作主人公……くそっ!!家の中を歩くたびに柱やタンスの角に小指をぶ

つけてほしいわ。

「俺……化け物に襲われて死にかけたものの……悪魔に生まれ変わったんですね」

自分でそういうとめつちや落ち込んだ……正直、この世界に転生しただけでも最悪なのに、悪魔になるとか……運がいいのはリアス先輩の眷属として三度目の人生を楽しむということか……

「その辺りはまた……そうね、明後日辺りに迎えを寄越すわね……あなたの手続きも色々変えないと……ね？」

なんだろう、聞くのが怖い……

「あの……リアス先輩」

「なにかしら？何か質問でも？」

そう、これだけは聞かないとダメだ。

「あの、俺を助ける時……何か言いませんでしたか？」

俺がそういうと、リアス先輩は考えんだ。

「……いいえ、私は何も言っていないわ」

「そうですか……とりあえず、質問は特にはないです……また次で会った時に……よろしくお願いします」

「ええ、よろしくね」



俺はリアス先輩を送り……考えた。たしかに……あの時、声が聞こえたはずなんだ。日本語……じゃないなにかを……そう……

「Amantes amentes — Omnia vincit Amor — ツ  
!!」

そういうと俺の頭がまた鈍器で殴られたような痛みが襲ってきた。まるで何かを警告しているよう……思い出しではいけない十二力を。

「ああ、本当に……最悪だなあ」

そう思いながら……服を着替えるが胸がキツくて服が着れないことに静かに涙を流した。

—●○●—

「晩御飯……どうしようかな」

やることがない俺は家計簿チェックしながら今日の献立を考えること。ぶかぶかのパーカー着て……

ピンポン

家のチャイムがまた鳴った……どうしてだろう……嫌な予感しかない。そう思いつつも、俺は玄関の扉まで向かった。

「はい、どちら様？」

「私だよ、君の愛人さ」

あー人違いですね、俺に愛人なんていないんで……さて、早く晩御飯に行く準備をしないといけないよな。

ガラッ

扉が開き、平然と中に入ってくるヴァーリに俺は啞然とした。

「どうやって入ったんだよ」

「こんな時のために合鍵をつくったのさ」

もう、俺の安らぎは遠いどこかに消えてしまったのかな？

「…直人……君、女装の趣味があつたのかい？ そんなに女性に飢えているなら私を襲えばいいんだよ」

「そんなわけあるかつ!!俺は至つてノーマルなんだよ……それにそんなことしたら俺は堀の中で過ごさないといけないだろう……それでなんのようだよ」

俺がそういうと扉を開けた、中に入ってきたのはシスター服を着た少女だった。それを見た俺は啞然とした。

「彼女をしばらく預かってほしいんだ……」

「あ、アーシア・アルジエントと言います!!」

ボールを取り、小さくお辞儀し、吸い込まれるほどに綺麗なエメラルド色の瞳を見た

俺はまた天井を見上げた。

本当っ今日という今日ほどついていない日はないだろう。

# 僧侶の眷属になるのはやっぱりおかしい

「コーヒーのむ？」

「私はミルクがほしい」

「あ、私も手伝います!!」

なんとか俺は落ち着こうとするが、トトトと近づくアーシア・アルジェントさん。

「あー、アーシアさん……君は客人なんだからゆっくりしていると良いよ」

ていうかしてっ!? そうじゃないと主人公くんに殺されてしまうから!!

「そうだよ、ゆっくりするといい」

「お前は自分の家のように寛いでことに違和感をもてよ」

ヴァーリは優雅に寛いでおり、俺の言葉にフフと微笑んでいた。

「いずれ、私の家でもあるんだから」

おっと、ここに不法占拠する女がいるぞ……今すぐ通報しなくちゃ……今すぐに!!

それをオロオロしているアーシア・アルジェントを見て少しほっこりする。アーシアさん、君はそのまま無垢にいるんだよ……そう、塩のように純白にね。やだ、俺……も

しかしてポエムの才能あるかも知れない……やめておこう、絶対に黒歴史になるやつだ。

「あ、あの……お二人はその……どういう関係なのでしょうか？」

アーシアさんが頬を赤く染めながら俺に尋ねてきた。

「うーん、なんといえばいいのかな……悪く言うなら不法滞在者？「違うよ、私は彼の愛人さ」

「え!?!」

アーシアさんは驚き、俺も驚いた……そんなの今初めて知った。

「でも、直人さんは女の人で……でも、愛に区別をつけるのは……でもでも」

「あー……アーシアさん、多分俺の事で勘違いしていると思うのだけど……俺、色々あつて元男なんだよ」

アハハと笑うが、心の中では悲しくなってくる。さらに俺の姿に納得できないアーシアはさらに驚いた。証拠にポケットにある財布の中にある学生証を見せた。

「ほ、本当なんですわね」

「本当困るよ、俺も原因はわからないし、このままだと学校にも行けないよ……ところでヴァーリはさつきも聞いたけど、なんで彼女をここに？」

「さつきも言ったけど、彼女には事情があつてね……私たちのところに来るにも手続き

あつてね、その間を預かって欲しいんだ」

それなら、教会組に……と言いたいが、それをするとアーシアがクソ神父に襲われるかもしれないしな。

「はあ、わかったよ……アーシアさん、空いている部屋がいくつかあるから好きならここに……その前に買い物とか色々しておかないといけないよな」

「やっぱりね……しかし、困ったな、これでは私と子作りができない」

「お前、もうちよつと場所とタイミングを考えて言えよ」

チラツと横を見るとアーシアの顔が真っ赤に染まっていた……あれ？アーシアって俗世に疎い設定じゃなかった？そして両手で祈り「ああ、主よ……」と祈っていた。

「昼ぐらいに駅近のデパートに行くのがちよつどいいかな……ヴァーリはどうするの？」

「ああ、私もここでやることはないからね……そろそろ出させてもらおうよ」

—○○●—

そして、俺とアーシアはデパートに向かった……あれ？これ、デートなのでは？デートって言っているのか……デートってなんだ？

「今日のご飯は……洋食の方がいいかな？アーシアさん、まだ日本に来て短そうだし」

アーシアもここにくるのは初めてなのか、興味を持つように周りを見ていた。

「とりあえず、まず服買おうか？」

「あつ、はい……………」

周囲の人がアーシアの修道服に視線が集まるのを感じる…………まあ、こんな綺麗なシスターがいるとそうなるよな。

その後……………色々と買い物をした。

「あの、ありがとうございます……………」

「うーん、別に構わないよ、俺もちょうど服買わないといけなかったし…………まあ、まさか女性用のパーカー等を着るとは思わなかったけどね」

自分の言葉に落ち込んでしまう。

「大丈夫です、直人さんはとても優しい人だと……………いつか直人さんの身体も元にもどります」

「そうだと嬉しいんだけど……………ッ」

夕方であったために…………出来損ないの人間の影が出没していた。無論見えていないアーシアは突然俺が立ち止まったことに違和感を持っている。

「e q e g …… h o e g …… u y w @ 6 e w e h k」

「直人さん……大丈夫ですか？」

「うん……大丈夫……大丈夫なはず」

俺はなるべく目線を合わせないようにまっすぐ進み出来損ないの影は呆然と俺たちが離れていくのを見ているだけだった。

—○○—

なんとか家に着いた俺たち……べったりと服に汗がついていた。

「はあ、なんとかついた」

「大丈夫ですか？……顔色がとても悪いです」

「問題ない、いつものことじゃ……全く」

玄関から出迎えてきてくれたのは伊吹だった、その顔はほとんど呆れていた。アーシアは初めて見る伊吹驚いていた。

「全く、そんなに真っ青になるなら通販を使えば良いもの……呆れたやつだ」

「ぐうのねもでない……あ、アーシア、……彼女は伊吹……まあ、見ての通り人じゃないけど」

「なんか雑な紹介だが、ゆるそう……小娘、此奴を部屋に連れて行くのを手伝え」

「えっ……は、はいっ!!」

そのまま俺はアーシアと伊吹に部屋に連れて行かれた………なんか本当に申し訳な



い。

「ふむ、ならば食に関して余に任せると良い……貴様はゆつくりと休んでおるが良い」  
布団に寝かされた……アーシアは何故か正座している。あれえ、伊吹さんこの状況はどういうことかな。

「あの……直人さんはどうして……何か辛い気持ちがあるのですか？」

「……まあ……俺さ、小さい頃……いや、物心がついた時から影に出来損ないの人間みたいなやつが見えるようになったんだよ」

何故か俺はアーシアに話していた。

「何かを話しているが、全く理解できないし……こつちに気がつけば襲い掛かってくる。誰かに相談しても逆に変な人扱いにされる……正直辛かった」

「……」

アーシアはただ黙って話を聞いていた。

「それでもさ、伊吹……あと二人居候しているんだけどさ、その3人は本当に信じてくれてさ、ここにはいないヴァーリーだって、俺を普通の人間扱いしてくれるんだ、それがほんとうに嬉しくてさ」

「直人さん……今日とても楽しかったです。私……本当に、教会では出来なかつたこ

とも……私、直人さんが変な人だとは思えません」

それを聞いて、どこかスーツと何か軽くなったのを感じた、なんだろう……なんかこうポカポカするとか……なんだろう、これは？

「やっぱり、私……手伝ってきますね」

アーシアはそう言い、立ち上がった。

「直人さんは、しっかりと休んでおくのですよ」

そう注意されてアーシアは部屋から出た……そういえば、リアス先輩はどうやって俺を学校に戻すんだろう？まあ、なんとかなればいいんだけど……なんか幸先が色々不安になりながら目を瞑る。

——愛なぞ不確かなものを好む奴らをただ奇怪で汚れて気持ち悪い。

—○●○—

「——てください、起きてください……直人くん」

誰かに身体を揺らされてゆつくりと瞼を開けると顔間近に姫島朱乃先輩が近づいてきた。

「くあwse drift gyふじこーpフゴツ!!」

あまりの驚きに俺は自分でも何を喋っているのかわからない悲鳴を上げたが姫路先輩が俺の口に手を塞いだ

「しつですよ、そんな声をあげてはご近所に迷惑ですよ」

そのご近所に迷惑をかけるような声をあげさせたのはあなたですよね？とツツコミたいが、我慢した。というより、柔らかな手が俺の口に当たってるんだけどね!?

俺はとりあえず落ち着き、首をうんうんと傾けると姫島先輩は俺の口から手を離してゆつくりと離れた。色々と疑問はあるが……まずは……

「あの、姫島先輩はどうしてここに……というかどうやってここに？」

「部長が、ここにきた時にまた何か異変が起きればすぐにそこに向かえる魔法陣を作りましたわ」

なるほど……いや、なるほどなのか??どこか納得いかないまま、俺は立ち上がる。すると姫島先輩は俺に箱を渡してきた。

「これは部長からです」

「はあ……あの、これから何を？」

「はい、部長が全員集合との……流石に寝着で連れて行くのはダメですので、こちらに着替えて欲しいとのことですよ」

なんだろう……俺の直感がこの箱を開けるなど囁いている。

ええい!!男は度胸だ!!と強気になり俺は箱を開け……啞然とした。そこにあったのは駒王学園の制服……女子用だ。

落ち着け……そうこれは何かの間違いなんだ……そう、男と知っているリアス先輩が俺に女子服を押し付けてくるはずがない。

「あの……姫島先輩、これは？」

「駒王学園の制服ですね」

だよ、普通そこは男物であるのが常識……何故なら俺は男だから。じゃあ、何故目の前に女子生徒の服を？

何か情報がないかとポケッタ中を探すと……何か固い感触があつた。それをポケッタから出すと……学生証だつた……俺の名前が書かれており、女性の姿である俺の写真も添えつけられていた。

ははーん、さてはこれを着て俺は明日から女子生徒として駒王学園を暮らすんだなあ………罰ゲームかなにか？

「無理無理!!」

俺は全否定した、何が悲しくて悪魔に転生して女の子として学園を謳歌しないといけないんだよ、俺何か悪いことしたっ!?

「ごまりましたね、それを着ないといけませんわ」

「いや、別にこれじゃなくても、春用のパーカーとかありますし、わざわざこれを着る必要はないと思うのは俺だけですか？」

「そうだ、別にこれじゃなくても大丈夫なんだ……大丈夫なはず。すると姫島先輩が笑顔で近づいてくる。何かわからない圧に恐怖する俺は後ろへ下がる。

「すみませんが急いでおりますので……さあさあ」

「い、いや……姫島先輩……話せば……話せばいやあああ!!」

その後、姫島先輩に色々とされた俺の声が家中に聞こえたとか聞こえなかったとか

……

—●—

「もう、お婿に行けない……」

「大袈裟よ」

色々ときれ、俺は現在旧校舎にあるオカルト研究部の巨大な魔法陣の中心にへたり込みしくしくと涙を流す俺……それを見て何も言えない空気の中リアス先輩が俺を慰める。

「あ、あの……部長、この女子生徒は？」

この空気に耐えれなくなつたのか茶髪の少年……このインフレ世界の中心であり、ハーレム王を目指すドラゴン系主人公兵藤一誠……初めて付き合つた少女天野夕麻……と墮天使レイナレに殺されて……いや、そりやトラウマになるわ。

俺だつたら死んでも死にきれない……もう死んでいるんだけど

「イツセー、彼女は……いえ、彼は鳴上直人よ。直人、あなた確か、イツセーと同じクラスよね？」

「まあ、そうですね……あんまり話した記憶はないですけど……」

それを聞いたイツセーは驚いた顔になりながら俺を見る……うーん、なんだろう、この既視感<sup>デジャヴ</sup>。

悪魔と墮天使の終わらない戦争、悪魔が転生した時のメリットなど……とても話しが長いと思いきなかつた。そしてオカルト研究部の自己紹介など e t c ……それと兵藤<sup>セイクリッド・ギア</sup>が持つ神器<sup>ロンギヌスブラスデット・ギア</sup>の最上位神滅具赤龍帝の籠手も確認された。無論、まだ本人もその名前を知らないし、俺も教えるつもりない……原作が崩壊するのは怖いからな。

閑話休題!!

「部長!!俺、上級悪魔になりたいですっ!!そしてエツチなことがしたいです!!」

リアス先輩から一夫多妻も認められるとしりハーレムを築けると考えた兵藤は机をバンつと叩き、立ち上がった。呼吸を荒くし、鼻の下をこれでもかと鼻を伸ばしていた。「……控えめに言ってます」

ボソッとソファの隅っこに座る白髪の少女、塔城小猫が言い放った。まあ、うん……男だからそういう夢を持つのは一向に構わんけどそういうのは時と場所を考えてだな。それに爵位とか……まあ、主人公だから多分取れるんだろう……俺は無理だろうな。

なんか凄そうな力とかも持ってないし……リアス先輩の下で眷属生活しとこ……

「おっしやあああ!!ハーレム王に俺はなるっ!!」

兵藤は片手を上げ、高らかに宣誓した、何故だろう……あいつのそれを見ると何か自分に違和感を感じる……どことなく……自分には持っていないものを持っていた。

—○●○—

兵藤が家に帰宅する中、オカルト研究部に残った俺は……リアス先輩に確認すること  
が一つあった。

「あのリアス先輩……」

「どうしたの?何かわからないところがあつたかしら?」

「そうですね……その、悪魔に転生ってどうやってするのかなあなんて……」

俺の質問にリアス先輩は少し考えた。

「そうね、本当なら次の日の放課後にイツセーと一緒に教えようと思ったけど……これ  
よ」

リアス先輩はポケットから取り出したのは赤いチェスの駒だった……ああ、これが  
イヴァイル・ピース  
悪魔の駒なんだ。

「純粋な悪魔が先の大戦で多く亡くなってしまったための打開策……悪魔の駒よ」  
イヴァイル・ピース

「なんか、チェスの駒に似ていますね」

俺がそういうとリアス先輩はフフと笑った。

「そうね、そしてこの駒を使ったとあるゲームが今流行っているのよ……それがレーディングゲーム、駒には主を王キングとし、女王クイーン、戦車ルーク、騎士ナイト、僧侶ビショップ、歩兵ポーンに別れているの」

「あの……俺はどの駒の悪魔に……」

「そうね、あなたは僧侶ビショップよ……しつかりと魔力について勉強するのよ」

それを聞いた俺は思わず、天井を見上げた……ああ、もう、原作が崩壊してもおかしくない……どうすればいいんだ。



俺に神器（セイクリッド・ギア）があるのはおかしい!!

魔法陣で帰らせてもらった俺は……着くと同時にブワツと汗が流れ出した。心臓がバクバクとうるさく鼓動する。どうしよう、どうしよう!!俺のせいで……俺のせいでアーシアが死んでしまうかもしれない。

アーシアは墮天使レイナーレの手によって神器セイクリッド・ギアを奪われて、命を落とし、その怒りで兵藤の神器セイクリッド・ギアは目覚め神滅具ロンギヌスとなる……そしてアーシアはリアス先輩が持つ最後の一つである僧侶ビショップの駒で転生悪魔となる。

そこを俺が死んでしまい、僧侶の悪魔と転生してしまった……これは横取りもいいところだ。無論そんなつもりはなかったと弁明はしたい、自分は悪くないと心の中で言い続けている。

「そもそも、なんで俺が僧侶ビショップなんだ、魔術とかゲームぐらいでしか知らないよ……はあ」  
一つの可能性があるなら……もしかしたら、俺に神器セイクリッド・ギアがあるかもしれない。  
「たしか……一番強いと感じる何かを……」

俺はゆっくりと目を閉じ……る。何も見えない……真っ暗な闇……これは死んだ後に似たような……冷たく暖かい……何かべつとりと自分の肌にベタつくのを感じる。

「s@b……Oqdk」rb……s@b」

「3……私……今jw@uiを」

ああ……頭が……頭が痛い……出来損ないの影が俺の中に入ってくるのを感じる。気色悪い気色悪い。離れる離れる離れる離れる離れる離れる離れる。

その時だった……俺の前に一つの陰が現れた。出来損ないの影とは違いちゃんと人間の形をしていたが……人と違うのは目の中に一つの瞳孔とは別の瞳孔を持っていた……一つの目に二つの目を持っていた。

「……………」

その影は黙って俺を見下ろし、俺の腹を蹴りつけた。

「かはっ!!」

腹から広がる痛みに俺は息も出来ず……そのまま吹っ飛ばされ立ち上がることも出来なかった。その影は俺に近づき見下ろしていたが……モヤみたいものが広がり、その影は消えようとした時ゆっくりと口を開いた。

『罪を抱いて生きろ。それがお前の罰だ』

そう言い、影は消え……出来損ないの影も消えて……気がつけば、自分の寝室だった。「なんだよ……あれ……結局、自分に神セイクリッド・ギア器があるのかわからないし……」

お腹をさわれば、さつき影に蹴られた痛みがまだあった。そして自分の腕を見ると

……黒い刺青があった……あの影と同じような瞳の模様……と蛇の鱗の模様があった。

「俺……刺青を彫る趣味とかないし……あるとしたら神セイクリッド・ギアの可能性か……」

こんな神セイクリッド・ギア器……どつかで原作で見たことあるような……たしか……えーと……あれ。

思い出した俺は手を叩いた。

「そうだ闇夜の大楯だ……けど刺青じゃなかったような……」

たしか……空間と別空間繋ぐような……どうすればいいんだろう？ 念じればいいのか？

そう思いながら何も無い空間に手を突っ込もうとした時……黒いモヤみたいなものが出現した。

「うわっ!!なんだこれ……どこに繋がっているんだ」

なんだろうこの感覚……どこかで触ったことあるような……いや、違う見たこと……そうだ、ドラ○もんだ、ドラ○ものの四次元ポケットだ。

「なんか、いいアイテムがあればいいんだけどな……いや、そもそも、これはどこに繋がっているんだ？」

悩みながら手をうろうろとさせると……何か柔らかいものを掴んだ。ほんのり暖か

く……………なんだろう人肌程度のそれ……………気になるので引っ張ろうとすると

「うん!!何かに引つかかって……………取れっただ!!」

俺は黒い靄から出たものを見て……………固まった……………それは……………純白のパンツだった  
「ちよつと待つて……………誰のパンツというか?!なんでパンツが取れたんだよ!!」

パンツを手放し、離れて頭を抱えた。何故だ……………何故、あの靄からパンツを取り出したんだ俺は……………俺は無意識にパンツを欲していたのか?そもそもパンツとは……………

「……………寝よう」

パンツを静かにリアス先輩からいただいた箱の奥底に隠し、布団を引き寝た。

—○●○—

朝起きて……………鏡を見ても、男の姿に戻っていないことのため息を吐き、歯を磨く  
……………この痣消えないな。学園で……………へんな目で見られないか心配だ。

「あ、あの……………直人さん……………少しご相談が……………」

「うん?アーシアさん、どうしたの?」

扉の向こうにシスター服を着たアーシアさんだったが、頬が赤かった……………何か言いにくそうな表情をしていた。

「あ、あの……………昨日の夜……………でたのです」

「で、出たって何が……………」

アーシアさんは重たく口を開いた。

「はい……………この世に未練を持つ魂が……………腕だけが彷徨い、私のパンツを取ったのです!!」

「ブフオっ!!」

アーシアの言葉に俺は心当たりがある……………あのパンツはアーシアだったのか……………じゃなくてっ!!やばい、やばい、これはどう乗り切ればいいんだよ!?

「あーアーシアさん、うん、その幽霊……………もう2度と出てこないから大丈夫だから……………」俺の言葉にキョトンとしたアーシアさん……………だってその幽霊の正体は俺なんだから……………土下座するのも辞さないが……………それはそれで後が怖い。

「なんなら、伊吹に聞いてみるといいよ……………あいつ、俺よりここに住んでいるから……………うん」

「ほ、本当ですか?……………聞いてみます」

アーシアはそう言い……………伊吹のいるところに向かった。そして……………俺はこれからどう償おうか、目の前にある鏡を見つめる。

「……………帰りにケーキ買おう」

—○○●—

悪魔としてのの仕事は……………チラシ整理にチラシ配りだった。一誠はハーレムを作り

たいが為に叫びながら自転車で町を一周していた。それからさらに一週間……契約の仕事など色々……ミルトンはミルトンだった（震え声）

そんな、今日は部活が休みだった為にアジアと……何故かヴァーリーも来た。

「お前、仕事は？」

「仕事はアジアの護衛だよ……君は？」

「俺は今日部活が休みだから……アジアさんが好きそうな所行こうかなって？」

商店街の人たちがザワザワと話し、こちらを見ていた。まあ、アジアさんは可愛いし、ヴァーリーもまあ……うん、綺麗だよ……中身が問題ありすぎるのだけど……

「ふふ、これじゃあ……ゆつくりと買い物出来ないけどどうする？」

「そうだなあ……ファストフードテイクアウトして公園で食べる？」

「わ、私は大丈夫です」

そして俺たちはファストフードをテイクアウトし近くの公園で食べ、アジアとヴァーリーは古びた教会まで向かったらしい。それが意味……更なる混沌を巻き起こすとは俺は思ってもいなかった。

—●—

「直人、あのシスターに近づいちゃダメよ」

「……………はい」

リアス部長に無論バレてしまった……………いっどこでまた化け物や墮天使が襲われてもすぐに対処できるように、リアス部長の使い魔に監視されていたらしい。

教会……………元より、アーシアははぐれ聖女として、要注意人物になつていることをリアス部長は危惧していたらしい……………幸いなのかわからないが、アーシアと住んでいることまではバレていなかった。

正直に言えば、今の行動や全て……………リアス部長に対しての裏切りでしかない……………けど、俺が原因で彼女が死ぬなら……………俺はリアス部長に落胆されたでも彼女を守りたい。

しつかりと怒られた俺はソファに座り込んで深いため息を吐いた。まだこの体が戻る兆しもないし……………セイクリッド・ギア神器は空間を繋ぐぐらいの……………戦闘向きではない。魔術とか魔力もそこそこだし……………

「おいおい、大丈夫か?」

「うん、ああ……………なんか色々疲れた」

一誠も心配してくれた……………まあ、一誠も胸とか変態とかじゃなかったら結構モテると思うけど……………まあ、それは俺のすることじゃないし……………個性を人の都合でつぶすとかやってはいけないことだと思う。

「あらあら、大丈夫ですか?」

「うわっ!!」

突然現れた姫島先輩に俺たちは驚き、それを見た姫島先輩はウッフと笑っていた。

「あら、朱乃……………どうかしたの?」

「はい……………討伐の依頼が大公から届きました」

その顔は……………先程の笑顔とは逆の曇っていった。

――●――

討伐の依頼は山奥の廃屋だった……………悪魔に転生しないと右も左もわからないほどに真っ暗で、唯一の明かりは満月の光だった。部長はその間に、一誠イーウィル・ピースに悪魔の駒について……………一誠は自身の駒をリアス部長から聞き……………酷く落ち込んでいた。俺から見れば……………そっちの方がいいなあと思う。

「イツセーくん、ほら先に進もう」

「うっせ!俺もお前みたいに、プリンスにぴったりな騎士ナイトが良かったぜえ!!チクシヨオオオオ!!」

「イツセー、立ちなさい」

「……………血の匂いが……………とても濃いです」

小猫さんがボソツと言った……………うん?何かがおかしい……………なんかこう……………震えと  
うか、恐怖がなかった。



「イツセー……なんか感じるか？」

「え？いや……何にも……本当にここにいるのか？」

「……とにかく、中に入るわ……みんな警戒は怠らさず」

意を決した俺たちは……廃屋に入って啞然とした。ポロポロ……壁には血がべったりとついていた。

「これは……どういうことかしら……」

リアス部長も想定外のこと……驚いていた。

「うう……ああ」

何かの呻き声が聞こえた……俺はその声に聞こえた方向に向かい……そこにいたのは……

「部長……いました……」

「……これは……」

いたのは、大公から届いた討伐の依頼のはぐれ悪魔だった……しかし、その身体は無惨にも……両腕は切り裂かれ、上半身の下から何もなかった。正直に思うならば生きているのも不思議だった。

「うぐっ……」

「……………」

俺たち全員は何も言えなかった……そんな中、リアス先輩ははぐれ悪魔の前に立った。

「最後に何か言い残すことはあるかしら？」

「……………殺して」

「……………そう」

そう言うと同時に、リアス部長の手から黒い塊が放たれ……はぐれ悪魔はそれに飲み込まれ……そのまま、何も消えた。部長も……なんとも言えない表情していた。

「……………部長」

「……………ええ、終わりね………みんなご苦労様」

リアス部長はそう言うが、いつもの雰囲気に戻れなかった。わかっている……あのはぐれ悪魔は、人を沢山食い殺した……あのまま言ってもリアス部長たちに滅ぼされていた……それでも、あのはぐれ悪魔の怯えようは今も俺の脳内にこびりついていた。

ふと……壁を見た時……そこにはデカく文字が描かれていた……赤い血……多分あの、悪魔の………血だ。

輪廻に花卉あり、花卉には花あり

「なんだよ……これ………部長」

「何かの表現……あのはぐれ悪魔を殺したメッセージかしら？」

……輪廻……その言葉にふと俺を殺した化け物が言っていた言葉を思い出した。

「部長……あの、はぐれ悪魔を殺したのはもしかしたら、俺を殺した……化け物かもしれません」

「……これは少し……厄介なことになったわね……みんな今日は戻りなさい」

部室へと戻り……そのまま解散となった。

――●――

それから……警戒する中、俺は小猫さんが担当するはずだった契約の家に魔法陣で転移した。リビングだった……白いチョークで描かれた魔法陣……蠟燭の火が灯されており、それが唯一の光だった。

「契約の……人はっ!？」

契約の人を探そうと歩こうとしたとき……靴に濡れた感触があった。

「なんだよ……これ……」

靴を触ると……俺の手にも何かべったりと……手についたのは赤い液体……あのはぐれ悪魔と同じ匂いの……血だった。

「なんで……血が……」

ピチャピチャと……何か滴っている音の方向に向かい、辿り着いたのは壁で……そこに男が貼り付けられていた……血の文字で汚く書かれている。

「なんだよ……これ」

「それは悪い子にはお仕置きしちゃうよ☆と、聖なる方の聖なる文字で書いているんだよ」

後ろから声が聞こえて、そこにいたのは白髪の子供の神父服の男……俺は心の中で舌打ちし、自分の不運を呪った。

「……本当、最悪だよ」

「おやおや、悪魔さん……俺様のこと知っているの？それは本当に反吐が吐くほどに嬉しくないね」

それはこっちのセリフと言いたい……正直にいうなら今の状況で最も会いたくない男……フリード・ゼルゼン……作中屈指のサイコパス神父だ。

「俺は神父、天才少年神父で悪魔の首をぶった斬りそれでおまんまを稼ぐのさ、俺の名前はフリード・ゼルゼン。あ、こっちが名乗ったからと言ってお前は名乗らなくていいぜ」

やっぱり……頭がおかしいとしかと思えなかった。

「……殺したのはお前か？」

「イエス、イエスどうせ悪魔呼びだすような常習犯はどっちにしろ人生終わっているんだ……俺が殺っちゃったぜ」

驚きとかよりも……人としてのクズだと思えなかった。

ブインと空気が振動する音が聞こえ、フリードの片手には光の剣を持っていた。

「それじゃあ、頭切り裂いて新しい感覚の扉を開けようZ E ☆!!」

そう言うのと同時に神父は剣を振り回しながらこちらに駆け出してきた。

「うわっ!!」

光の剣が横なぎに放たれる、俺は咄嗟に横に転がりこみ避けた。それと同時に俺の太ももから痛みが……

「あっああ!!」

熱い……熱した鉄の棒を押し付けられたような痛みが足から駆け巡ってくる。いつのまにかフリードの手には光の剣以外に銃口から煙を吐いている銃を持つていた。

「どうよ、このエクソシスト特製の弾は？達してしまいそうな快感が俺と君を襲うだろうっ！」

逃げられない……応援も無理………神器もまだ使いこなせない。神父が変な笑いを浮かべながら俺トドメを刺そうと近づいてくる。

「やめてくださいっ!!」

聞き覚えがある声に俺とフリードは顔を向けると、そこにいたのはアーシアだった。

「おんや、アーシアさんじゃありませんか、どうしたの？結界は貼り終わったの？」

「……フリードさん……どうして？ 罪なき人を……それに直人さんも……」

「何々、知り合いなの？……あ、もしかして…… 百合っていうやつ？ いいね……俺も混ぜてよ」

面白おかしくフリードは俺とアーシアさんを交互にみる。くそ、反吐しか出ないほどのクズ野郎だ。

「あはは!! けど悪魔と人間は相入れましえん!! それじゃあ……早速……あ？」

アーシアさんが俺の前に立ち、両手を広げた。

「やめてください……たとえ直人さんが悪魔でも……絶対にあなたみたいひどいことはしません……お願いします」

アーシアさんの懇願にフリードは固まっていたが、その表情に怒りが集まってくる。

「お前……ふざけんなよっ!!」

「きやつ!!」

「アーシアさんっ!!」

フリードはアーシアの頬をビンタした。俺はそっちに向かうために立ち上がろうとするが、フリードに剣を突きつけられ動けなかった。

「ふざけんなよっ!! ふざけんなよっ!! お前、自分で何しているのかわかるのか!? お前マジで頭にウジでも湧いているのじゃないかっ!？」

「お前がふざけんなよ、フリード・ゼルゼンっ!!」

怒りが俺の中から湧いてくる……足の痛みも怒りで消えたのかゆつくりと立ち上がることができた。

「ああ？ お前自分の状況わかってる？」

俺は弱い……今だってフリードに手も足も出ずに死ぬかもしれない……けど、それでも彼女に守られた……その恩を今返さず、どこで返せというんだ!!

その時だった……俺の影から細長い針のようなものが飛び出し、フリードのお腹を掠った。

「なっ!？」

疑問に持ちながら、フリードは俺から一步下がった。なんだよ……今のは……俺は何も……

ふと腕を見ると、二つ目の黒い蛇の鱗が崇めていた。

「チツ!! 神器セイクリッド・ギア持ちかよ」

……空間と空間を繋ぐだけじゃなくて……影を実体化させるのが……本当の……けど、これなら!!

「え？ え？ マジで俺と戦うの!? まあ、どれくらい肉を細く切れるか世界記録に挑戦してみますかっ!!」

『うふふ、メインディッシュがこんなにも』

フリードが飛び出してくる瞬間、ゾクリと体温が低くなるのを感じたのと同時に、家の壁が破壊された。

そこから現れたの……俺を殺した化け物だった。化け物の顔などいたる所に返り血を付着していた。

「おや、あなた……ああ、以前廃屋にいたのと匂いが似ていますね」

「どうやら、この前殺した俺と勘違いしている……」

「あれはとても食べ応えがありました、少し獣臭いのが難点ですね……さてはあなたはっ!!」

化け物がしゃべっている途中、化け物の頭に何かが当たった……しかし、化け物の頭は吹き飛ばず、少し血を流していた程度だった。

「おやおや、人が話している状態だと言うのにマナーがなくなっていませんね?」

「ああ?俺の邪魔して、こんなにも不愉快なのは即死刑Death!!」

「それもいいですが……私はいささかっ!!」

化け物はそれと同時に俺の視界から消えたっ!?どこにいった!?

「お腹が空いていますので……柔らかそうなお肉を……っ!!」

「きゃっ!!直人さんっ!!」



化け物はアーシアさんの後ろに回り込み、アーシアさんを担がれた。アーシアさんも離れようと暴れるが……

「おやおや、そんなに暴れると……強く力を込めてしまうじゃありませんか……」

「化け物、アーシアさんから離れろっ!!」

影の触手のようなものが、化け物の足に絡め取るが……こんな時間稼ぎでしかない。

「おやおや、変な能力ですね……まあ、もつとも!!」

化け物は俺の方までジャンプし、そのまま拳を俺の腹を殴った。その威力は高く、俺は庭の壁まで吹き飛ばされた。

「かはっ!!」

「お腹に背骨が……全部が痛い……意識が朦朧としてきた。視界が……霞んで何も見えない。」

「ああ、お腹すきましたね……おや?」

そう言ったのと同時に……赤い光が……ああ、そっか……きたんだ。部長たちが来たのと同時に俺は……安堵したかのように気絶した。